朝夷巡嶋記

第六編

巻五

へ13
704
30

早稻田大學圖書
門 13
號 704
巻 30

明尾点水著
東湊源瀬校　考槃餘事　白紙摺明朝綴　四本全四冊　文房清玩必用之書也

題画詩刪　全二冊　題画詩選　全壹冊

奚疑先生撰輯
書畫皆宜　白紙摺明朝綴　快八本全三冊

書家必用の小冊諸君子常に案上に備置べき者にて其ぐ簡用卒て網羅せられ詩題画賛を始として絶句聯句六言も更なり數字の外事對聯に至るまで悉く撰て備へ載られたり此書を讃ぜる者其自在を得るとまうし云べき寳の書を讃むの君子必携易の珍寶とも可謂小冊なり

書肆　大阪北久寶寺町心齋橋
前川源七郎梓

明治三十六年十月九日
購求

朝夷巡嶋記全傳第六編巻之五

東都　曲亭主人編輯

後輯第五十七

節義の守戸浦
損益の元鳥塚

光仲の憂物がたりに人々駭き且感ずる。その中に義邦は且見姫の送せし歌をよみ返しうち吟じて後悔嗟嘆に勝ざりけん光仲にうち對ひて辞のもとめを推もて見ハ某が愁に蓁二郎を八田の莊へ遣しゝりける故なり。此よしなきわざしつるか私といふを光仲がおとせいりでうへさることかれ。小袋坂の窮阨にも交遊の義を忘れずで彼男をもて守直が資とせられし。よもなき親切他人の及ぶ所にあらず。汝にかほ慮ひ足らずして且が妻に頭髻を剪らせ剃忠信節義の蓁二郎梭枝に亦非命に殺せし錯誤ハみな某が方寸也。

惑ひより出さうといふも面白きまで守直もさぞ恨みけん。あくまで高吉
等ざるる程も影護といふ人食慰め難く齊一嘆息もこりける登時
義秀膝を進めて藏人さの〻歎ぬるの四時を行ふ天地も寒暑不順の
差舛あり。聖賢も亦然あり。誰う愆ぬ所ぬ。そを改ふまもこと勿れ。
婦人ハ胷の廣〻ねば。冠屈の怨よ身を措うひて早〻頭髻を
剪られ。ども尚祝髮ふ及ばぬハ相計ふ術もあるべきやハそこのまハ
某ふ。うち任しみへ〻抑且見姫の一條ハ前日小壺の浦邊ゆく某
これを笑へれども告るよ眼あり。和殿の夢想ハいよ〻奇やそ。
且精細あるを中を始りるぞ笑るハ箇樣々々と浦太郎ぞ支の趣
首より尾りまで言送もあく說示せば光仲義邦ハ高利
廣光高吉ふ城戸水草馬養の青年輩まで中あべく兄弟夫婦

一對の彼誠心を感じる。次の間よ〻人ありてよとばりふ泣沈む老女の
声ぞ笑へける。當下義邦ハ廣光ふをえ〻りく彼藁二郎ふ異父の兄
あるまハ小袋坂の危窟の折ふ笑ハ如そ。その嫂と共侶よ黄泉の客とあん
とハつ〻ひけ然ばそ死ぬるあハ惜やど返るべくもあるぬ幸ひ中と
かの兄ある浦太郎と致ふ。朝夷ぬ〻ふ値偶せハこも亦一奇支ぞ。
とハへば廣光さハ浦太郎ハその霄より〻の御館ふをる中れば朝夷ぬふ
請ぬうきん。御對面あれ〻といふを義秀側より〻ハいをまでもあ〻ハ件の
男を諸君子の見參ふ入まんとて。召のぼ〻置ることいひて外面ハ出
して浦太郎ハ那里ゆをる。近く進やと呼立れば緣頰の畫処ある。簀戸の
蔭より〻心をる声隱らせ〻浦太郎ハ光仲の夢物〻りを洩ぬ〻より胸塞
ぬて。たゆ〻ちる涙の雨の袖ふ漏ても〻ぬ憂ハ漏れぬ葛かく〻。

圍坐の席の末に數ゑぬ身のゆゑ列に現一樹の蔭他生の縁と縁
類に進まも入らぬ額つけば義秀うもらをく浦太郎是首より彼首へ退うねば。
諸君子のいれしるも多田氏の靈夢のうもよくゆえるあんあを臺二郎が
故主なる吉見殿ぞあの方さまの桜枝が主なる多田殿ありとひとりくに告あれば。
義邦ゆをう進まありゆゑ浦太郎欲もゆてあひぬ幾遍ゆをも返ねばをいかい
無益に似れども死して灵ある臺二郎桜枝が忠義へ今ゆくに感もるよりあり
あり。それも劣らぬ汝が誠心貴賤その差ありとゆとも親の心を思ひ汲て弟に
家を嗣せんゆに逐電せし吳の太伯の志に似うとゆへ半只この一條のみ
なれど婦翁の恩を復さん為に飽ぬ夫婦の別れをつ活業をもえくゑで。
多年心を竭せと欲天感空しうねべを朝表ゆに値遇せしに獲ぐ死
両隻の鰐を刺ゆ。みな同日の美談なれ是をあひ彼を見ば臺二郎は

あの心地ぞいる水意に感ゆ對面をり紀とゆに高利廣光高吉みの進み出
名告をいに只管誓て已ざりゆを且くして浦太郎ハ頭つ紀る頭を擡過世より
てゆこの年来なん度顧を稟せしに臺二郎が兄なりとて大人君子の忝く
なん目をあるのみをそいと懇に感めあふを幸ひとゆよりべき又幸ゆをとや
まう浦太郎ゆの歓びに就て亦ゆ哀をも下しまぬをハ臺二郎桜枝が身後の
忠義の彼首へも浅ぜそえればいと悪ある心ゆて佳らく思ひへば大約貴殺も
賤ゆ夫婦の情義ハ下易に始あり終あり。の一始あり終あるハよゆ良
善の君子こゆとも徳に剛ら所ありと憚ゆる事ゆ人愛の平塚太田の
殿の[illegible]なん疑の解さゆあいゆのをば姫ゆ人を召ゆさせゆへ伝ゆるとゆハ主従が
今生後世の雲霧く天津月日をうるよりあり只願ハいこのすみこいこの
俟さいぐさゆる誠ハうえをくあれと光仲これをうもゆくく扇を務に勝推向

浦太郎あの〻こへ進められを藏人光仲がれ醫ふ名告をもべうーとのの
ざるまーハ汝が為ふ酒うーへ差る故そうーかるふ心の誠を演くいれー趣愚意ふ
稱へり光仲も亦木石あらねバ越ふ夫婦の再會を欲ざるふあらぬかとの
ふ尤難義あり且見ハ早まて頭髻を剪ゐ召ぶとも輙く帰ぶ〻こへうう
ひへバ光仲ゞ身の非を歎るふ似れども彼飯酢の下條集ふ隷これる。
守ゞそよく知れとひく後方をえんとを義秀ゞ遠くあろ泊く守ゞ知る。
とゞ立れバ先の程より紙川のあれふ位沈ゞ守戸の高ゞ心をふく浅ゞ歌て
かそるへ進ゞ入るを義秀義邦粹を被て為も間近く待ゞ登時守ハ
眼包ふ残ゞ涙を袖ゞ拭へども要時頭を撞ゞ伏ゞ中て光中毛秀
義邦等ふ對ひてふ曩ゞ曩ゞ拔技ゞ縁ふ連て武藏あり寄せあひる。
姫うへのあん消息をみそうふ取継あるーせーそのゞ忽地寃とゞ〻る情ゞ

先より殿ゞこのあん物ゞうふ驚ゞ記待りぬあゞ詩言ゞ似れどもかの折武
藏の姫うへより贈らせあひーー磁器ふ異ありとも絶て泊知らぬゞの結豆ゞ麋
一隻の烏の死ーるとゞんてあろもはゞ作りしゞ今作ゞ〻ゞ田の殿のゞ物ゞうふ
曩合ーて毛骨も埋ゞ死ゞれバ殿のあん疑ひハ寔ふ然ゞ〻ゞ記まゞゆーゞ。
この惡ハ矩を踰ゞ拔を犯ーて姫うへのあん消息を取継ゞるゞ〻ゞうへゞ
待るうーゞあゞ〻ゞれまーと御灵夢のゞ云云と姫うへふ具ふ告ゞ〻ゞあ〻ゞ御髮を
剪らせあゞとも就ゞ帰らせあゞゞゞやゞとゞゞ後方をえゞうて南浦太
とのゞあゞふまーゞろ拔技ゞ自殺あゞゞ對面ハせざりーゞとゞもあん身の舎弟
蒙ゞこのゞ忠魂義膽微りせゞいゞふーて姫うへのあん孺衣ゞ乾ゞまーあゞん
齢四十ふ及ゞあゞゞ子のあゞゞゞゞゞゞが女児とゞもゞひーゞ姪を先ゞてゞる悲ーゞゞ
屑ふ泊ゞゞゞゞあん身ハ舎弟ふ立代ゞゞゞゞゞゞゞゞ拔技ふあり代ゞゞゞ姫うへ

御夫婦再會のおん使ごもせばりせば草の原なる妃人ふ在が八郎と共
ヨんおん身ハ何と云ふぞゑと向れて勇む浦太郎ハ頻ふ勝の進むを覺むをそ
某も願ふ所ゑ君を思ハ身を思ふこの議ひよく成就せバ共と妻ハ主僧の
讀經ふ優く佛果を祈んあるべし郎君吉見の飛ぞうゑ共ゑ添させ
彼姫ゑ人の帰ゑ思ひ人相討をあくまほしゑ御慈悲々ゑと彼此へ額
つく姫夫妻の殊切なる願ひ深ゑ後の名ふ家守ゑの浦ゑ船渡りゑ
人食道理ふ逼られく感涙の外なりけりそゑ中ふ義秀ハ勝ゑ拍ん声高ゑふ
通微妙ゑ願ひなり。これも亦件のゑ日ゑ藏人夫婦の為ふ肝膽を
摧くゑのゑこの議輙く整ひゑ情由ハ只今夏田生のいれ如ハ歎ゑ
且見姫ゑ人ゑ帰ゑより尼ふなるべゑ情願あり。と駿河前司の許ゑて藏人ふ
妻ゑ云ゑと伺ゑ笑ゑを思ハ合ゑ今その意中を推量ふ蒙二郎ふ灵ゑ

枕ふ立夢ふ入りゑ寃屈のゑを諦ゑ一ゑ良人の疑ひ解ゑうと報ゑを喜ゑ歎ふ
べし然ゑ頭髪を剪ゑるまふ阿容々ゑと帰らんや前非を悔て丑ふ代ゑる
蒙二郎ゑ身後の義列を伝ゑ思ゑ渠をも憐むゑ弥増て出家の願ハ
決定ゑ藏人も如右ゑ一人の為ふ謀られ身ハ恋を知ゑとふとも男女尊
卑の差別あり今ゑ一ゑを揚り腰を折ゑ賠話ゑ妻ふ帰れといふ冠と優と
処を易ゑ倒ふ懸るゑ如し首鼠両端ふ決めゑひて須ふ之の故ゑ有れども
汝達ゑ弟と姪ふ代らんと願ふハ則ゑ有ゑの誠産靈も感應あゑ不測の功を立
ゑ思ゑ一ゑこれ只ゑこの義を父ふ請ゑ守ゑ戸ゑ身の暇を取ゑ浦太郎ゑ共ふ伊
豆の愛玉ふ赴ゑ告ゑ姫ふ仕ゑよ藏人もこの便りふ就ゑ言告ゑ
よ思ゑ一ゑ思ゑ出家を禁め折を窺ひ時宜ふ依ゑ叔蒙二郎
授技ゑ灵の寃屈を諦ゑ一夏の趣藏人も亦後悔の言云云と報知ゑて間中

隼人と捐諫ぞその間に且見姫の思ひ居る心の迷ひも頭髻も伸て事の成らんよくせよかしと説示せば浦太郎は守戸と共に一議に及ばずまなく勇みて御教諭うけたまはりぬ明暁発足仕らんといふに歓ぶ下河邊高吉も亦進みて如く朝夷大人の思ひ計ひは一言隻句も皆千金の如く感服仕りぬ就て守戸浦太郎には按校が為めに叔母なる蓑二郎が兄とせよとも姫うへ謡りあるべき疑ひなくとも帰し某も亦共侶に彼地に事ばあらば安房川のうへに便りあくてそれいなと文が高利義邦主従その残寃に為り疎し蔵人奴しへの…と問れて光仲貌を改め不肖の某かくまでに諸君の群議を労することあれ莫大の幸ひといふぞら推辞せず且見姫は己が妻なら駿河前司の息女にて鎌倉殿の宗族より某は素刑餘の賤隷婦翁に代りて征東の大任をなふといへどもそまた一炊の栄華にして今は浮浪の窮士なり且見に

些の瑕ありとも前司殿の恩義をおもふべく去らるべき妻にあらば況て那時飯酢の絆の真偽を考糾さで怒りて歌を贈りしは短慮に似て今更に後悔斛を噬の外なし然るを僅に歓ぶべきは最襄に按校蓑二郎が忠告の灵魂あり今は守戸と浦太郎が使を望む媒妁ありかく文ばそく光仲が色に愛情に惹れて妻に逢んと楽みにあらばまたよろこび妹伕の縁しを結んとも又結ぶとも太田は且見が荘園あり彼処に交して後見せば是あれびとそ世をも捨て往方もしらせずありなひし前司殿の恩義に負くそ悲へあるまじ小三郎もこの意をしらく守戸浦太が案内をせよ伊豆へ遣も物してあれといひつつ短刀引抜て頭髻を帯と剪とりつ是を収めて更に又墨斗の筆を抜出して且見姫の袱の裏に　まづつくのかき名をそぞる濡衣はおまとするべき祥あぞありけると書れる件の歌に推並べて　後の世をかけてむすびし

黒髪の紊れをそなたやとまりに書とゞめ讀ゝ〳〵て両隻の頭髪を推
包む紙の端をもそゝぐ結びてのゝしとて守戸浦太郎がわとりかゝ
よばれがおをそもゝふとたゝうふ人衆駭嘆せざるもなく呆れく目と目を
指るのゝあと向ふべくもあらぬ義秀ひとり些も驚ぬ左右なくく
ゝ〳〵くゝ諸君子何とうんぬひくゝ夫婦の離別ふ世をそゝろかくく髪を
剪る藏人あるんや先ゝこの意を猜しめへといひて驚く光仲ハふを招て
推禁め朝夷ぬしの賢察いこの席ふ外漏ぬべくゝ某既ふ世ふ捨られても
憐命のあるん限りハ浮世ふ望ふ紀あるを
示ん薙髪の體い嫌忌を避ん為ふ科ふ紀宜見を誕ゝ〳〵この怨ぞ
慰る報ひをあふ包ゝ曩ふ廷尉ふ義盛を預けまゝり弓箭を取ふ世
ぬひゝとのふ義秀常鳴ゝく童扈徒を招き綽云云と分れ

ゝる果ゝく退出て且くしてもて來る弓箭を光仲ぬそゝ受とりそうゝ戴ぬく
左右ふつゝ立下阿邊小三郎近く進そゝ柔きあれゝ兄家の重宝雷上動
透羽彫羽の弓箭ゝ頼政卿より相義ゝて仲綱ゝれを駿河守廣綱ぬゝふ傳へ
ぬゝを今るふ経任征伐の折不肖の某借用ゝて國賊を討夷げしも皆この弓
箭の德ふゝく靈応灼然あるゝハ世の人もゝく知まゝ光仲既ふ黙られく
道へゝ人ゝゝゝふ留置くべゝゝのふあゝゝゝかれば仲綱の御子孫ふ譲ゝへと
ゝゝひゝゝ吾を亀ゝゝれゝゝその日より廷尉ふ預措ゝゝ仲綱の兄ん子許ゝあり
嫡男肥後守宗綱ゝゝゝ治義四年の戦ひふ屯道ふゝく自殺ゝゝぬ二男
左衛門尉有綱ゝゝハ治義四年六月十九日伊賀國名張ふく平時定ふ
撃れゝゝひゝ三男田代冠者頼成ハ今ふ鎌倉ふ在りといへども采利の為ふ
恥ぢゝゝ傾城局の別當を奉ゝゝゝゝ人ゝれば頼げゝぬ四男廷尉成綱ハ

朝ひる
間中隼人
浦太郎
光仲
下河辺十三郎
已主後と
言たいの
再會の
二

既に多く世を逝ぬしぬ五男に廣綱朝臣ゆく實に仲綱の養嗣なり男
判官代頼季も近属物故のよえあり主のうえに高吉も豫てよりよく
知りつゝんとり伊豆守公綱ゆゝに宗綱のむ子ゆゝく仲綱朝臣の嫡男なり
弓箭を取て父祖に劣らぬ大内の守護とゝく年来在京なれば
箭を公綱ぬゝに譲らんとなれども和歌伊豆に赴ぬく且見姫もこれらのこゝを
告く華洛に走登り公綱ぬゝに偽へよゝし彼人ゆゝぶの後の住ひを甚歎く
問れば　ゆひ入る深山の牡鹿皮とぬん弓箭を捨ゝ身をやけること
なりやまずとぬん。と答へよゝし。と叮嚀に示しゝ弓箭を遽与まふあん高吉はその
との理りなれば推辞ゝ応ゝてど畏るこれを見彼をあひぐむ。義邦主従
高利に守戸浦太郎の儔まぐ分に赴ぬく慰る言の
葉も多く深夜の席上にぐ蕭介ゝ光仲左右をえんへりて喃諸君子

かうしぬく愛惜の述懐は似られどもむりゝに外に聞せゝ書の彼邯鄲の黍
一炊も忘べ今のこどうゝ人なり除目補任の目覚ゝにも把安南柯の一夢過ぎ
かもびけふより道弾を挑中齋とゝのべ紀のことをうゝ紀やとうも笑へば
義秀も亦含咲く光仲入道挑中齋こを相応ゝ紀佳弾こう彼沈氏
既済をゝん世に在ゝぬ壁署を書ん枕といへば既に寂よとの鐘も
響くゝ浦太郎守戸に起行の准備をせぬとのそうせば
高吉も亦共侶にとく齊一立んとまる程に次の間に人ありくゝよ使ぬ
と呼禁めゝく猛に進ゝ入るものをとこれば是別人なゝ間中華人守直
なりもひうけなるすれば多くゝに。
つゝくとうち日成ぬ守直ととと合笑く先義秀に仕官を奏ぬ義邦
高利光仲に蟄居免許のよを祝ゝく又光仲に對ひていふ此度某當所に

まつるを縁にも知せまゝ孤ばさを訝しくおもはれん先何よりうまらに紀いぬる月の阮難ふ按技藁二郎ら灵魂の貿ふ有りくて捕らを飛脱け紀とり姫うへふ俱し
生りうく伊豆を志ざく走る折ら彼ん頭髪を包せあひし祇物ハ苦大ざをくも
奪略りくるを怒地虚空ふ吹升されく往方もあらぬかりしふその霄再変れ
大奇事ふく吉凶料をかこうしふこれやもあらく怪し紀ハ剪せあひし姫うへの
御髪ハその夜次の夜と夜毎々ふ延ると或ハ四五寸七八寸既やしく愛玉なる
藍玉院へ著ゆ日ハ御髪をドふ弥倍く地を引ゆふまでふ有りくうもあ
未曾有の珍支あれば某諫まりく祝髪得度のるを及ばも舊の侭あく
をりませしふ一昨夕ゆうふく按技藁二郎ら尋来て灵田殿吉見佐味の殿
ゝ明後日ハ赦免の慶びあらんとく鎌倉へ赴紀ゆ遅々せば後悔あるべしと
報るとやへば夢覚うう天明ゝ後ふこのうを姫うへふ告まうせば姫うへ驚紀

欽びくゝいが昨宵見る夢もをやこの夢と一点違ハぬ正夢である
べ紀ふとく鎌倉へ赴紀く縁の虚実をあらせまかと宣ふふ憑しくて彼院ある
女僧達ハ姫うへを委任く獨濱邊ふ赴紀く便船を寄る程ふ石損し船の
鎖倉へとく纜を繹くと咲えしうハ便求めて港成も下田の浦を発出せいけん
暁のすがしふ折ら順風ありければ三十餘里の海上を只一日ふ乗著く且巷
談を拐きくふ主君并ふ殿ゝらの恩免の沙汰夢想ふ違ゝを朝夷大人の柳
営へ徴れあひしうふ入ふまゝく定うふ紀しうハ海月の骨ふあふ心地して勇ゝ
足も進ふ隨ふこの御館へ推参せしハ黄昏時のすがり紀かて大殿義秀ハ若殿
常盛をふ見ゆしく由を述しふ大殿の宣ふやう義秀ハ灵田吉見佐味の人々と囲半して
如此くくの座敷ふをり今酒醼の最中あるんふとく彼処へ出れとて童子邑送を
隷られうかくくあの次の間まで来る程ふ諸大人の物ゝくうひのと薯ゝふ紀ゝ

うべその言果て後ほども見参ほ入らるとぞ宣ふく業内の童を退けてひとり建屏の蔭ほ坐をとりてやがて時を移を程ほ曩ほ主君の霊夢のまま併ほ守戸浦太郎ほが素生も又その心操も勝腦かりて又只渠ほのうへのまま主君の後悔弓箭のうちん誓を剪めほ折ほ至さいよく駭嘆禁めもうんとくく立あくもほ及ぶべくもあらざれば涙れ胸を推居さく猶も彼首ほ向ひほ殿の頭髪を剪めひーほ別ほ賢慮のあるまゆく只一ほ姫うへほ贈らせあほ故のこをまを洩さーまりそでをさく安心今はかうとぞをり朝夷大人の云云と守戸浦太郎ほあろはさーて小三郎共侶ほ姫うへのおん為ほ愛王へとて起行の准備を急がせあほおん姫うへの無為御髪のまま今この折ほ告まらさぞは怠慢の罪免れがたしと思ば声をあり立く漫ほ呼禁めひとまを曩ほ桜枝蔓二郎ほが自殺の折の為体いとしるよりは如此をさへ亦後渠ほが霊魂

顕れ橋間岳六等を撃走らーて高光景は箇様々々と具ほ報て又ひまう。
ぞくが如は浦太郎守戸も劣らぬ孝友節義多くなれば紀の共ほ只恥らくを
綽の初ほ某慮ひ足らぬておん消息の寃とありーは大くあく紅涙ありもは
あれども漸くほ尼釋け禍退はくかる國坐の席未ほ乾り合せー期の歎び
喻ふほ物も必ずも乞併朝夷ぬーー御橋梓の餘光あるべー寔ほ愛とー愛
たーと壽は勇む主従の再會は現頼しく耳新ある珍説家信ほ光仲頭を
傾けく感ーく只顧嘆賞を況く席ほ在りと有る友人主従推併く誰も感
嘆せざるべは物ほ動せぬ義秀さへほ咲片向く悦は畏ぎかの忍ーーり産ほ
易ーとほ鄙語も似るかか奇ーくと稱へりをぞ中ほ光仲は又紀るほを額ほ
加く肩より息を吻は忠臣烈女の霊あるはーは和漢ほ先蹤多れぞ
蔓二郎桜枝が霊魂捕るを矢庭ほ撃退けて又夢ほ入り頭髪を届け且見

明の建文の[illegible]

姫の寃屈のすを訴るもの怪し。如なる姫が剪こる髪の三四宿の程ゆゑ舊の如くふ延るハ鬼神もよくしかさ[illegible]ベ。現未曾有の奇特〻唐山ふハ元祐年壽星降りて道士となり妙酒を喫を日ふ一石その頭の伸ること一宿ふ長三尺ふ及びしとぞ世ふいふ福祿壽星これ[illegible]れども人倫の亂をゝぬ星の精の[illegible]ベ且見が例ふ援くべくもあらず。[illegible]ふ貞女の寃を憐む神明仏蛇の眞助あり狀然らぬハ三位入道頼政を已下父祖の神灵の祝髪を禁ゆあるべ[illegible]んと知られしと光仲ハ頭髪を剪く嫌忌を避しも科なき妻を誣う[illegible]ける悪報とふべしなめこ損益得失寔ふ[illegible]ある[illegible]ふ至るこゝろ[illegible]の以ゝ[illegible]ぬを知るふ足れりかくて此剪こる髪が頭髪ハ且見姫ふ示して後藍玉院ふ相瘞めて髪塚とも呼做ベ自他勸懲の端とかゝん是光仲が願ひこ高吉守戸浦太郎と舟行を伊豆へ赴かくこれらそれより先且見ふ報ふ守直ハ留まて翌ハ吾倶と共伯ふ

太田の莊へ立ちくりく兵火ふ失る家のすの工作をいそぐべし。土木の功の終りかバ且見姫を迎入れくれハ諸國を遊歷しつゝ廣綱朝臣の在処を尋ん今更夫婦再會の緣云云と世ふ知られぬ亦彼人ふ忘ぬべしと示すを義秀うちなげてその議誠ふ肝要こ灵夢のすも且見姫の黑髪の猛ふ延るる奇ふ誇りくロ走らべ。そを稱を招くふ敢しく秘めくとるを抗こ諭ぶ幾度有理と忍こく斧一口ぶを箝こけるかくて守直高吉ハ自他主後の恙なくこの再會を送ふ祝して別後の情を述る程ふこの言果て義邦ハ後方ふ行りし武詮と昌之を見こりて四郎太郎五こを次進めといひて義秀ふうち對ひく朝夷ぬし某今置土産ふ足下ふ送る物ぬこの武詮昌之ふハ信夫莊司の舊臣こうこぶ譜第なるぬハ足下も知りぬ。

明の建文の[illegible]

姫の寃屈のすを訴るもの怪し。如なる姫が剪こる髪の三四宿の程ゆゑ舊の如くふ延るハ鬼神もよくしかさ[illegible]ベ。現未曾有の奇特〻唐山ふハ元祐年壽星降りて道士となり妙酒を喫を日ふ一石その頭の伸ること一宿ふ長三尺ふ及びしとぞ世ふいふ福祿壽星これ[illegible]れども人倫の亂をゝぬ星の精の[illegible]ベ且見が例ふ援くべくもあらず。[illegible]ふ貞女の寃を憐む神明仏蛇の眞助あり狀然らぬハ三位入道頼政を已下父祖の神灵の祝髪を禁ゆあるべ[illegible]んと知られしと光仲ハ頭髪を剪く嫌忌を避しも科なき妻を誣う[illegible]ける悪報とふべしなめこ損益得失寔ふ[illegible]ある[illegible]ふ至るこゝろ[illegible]の以ゝ[illegible]ぬを知るふ足れりかくて此剪こる髪が頭髪ハ且見姫ふ示して後藍玉院ふ相瘞めて髪塚とも呼做ベ自他勸懲の端とかゝん是光仲が願ひこ高吉守戸浦太郎と舟行を伊豆へ赴かくこれらそれより先且見ふ報ふ守直ハ留まて翌ハ吾倶と共伯ふ

後学のい廣光と継忠と両老黨ゆゑ事定れを願ふこの壮佼さを足下は附屬せゆく欲もさせる要ゆ立ぜとも駑馬ゆハ優もとあくん四郎太郎主この意を汲くみ請ませよといふれく齊一額をつゑ御諚承りゆゆ某ホい敗軍の残兵でいをゆ曩ゆハ多田殿ホ従ゑ城を接ゑ賊を屠ゑ朝夷大人の庇ホ立くい父兄の讐の首を獲ゑりかれ此この両君ハその恩義主君ホ等し。何ホ仕まるとも合體同志の殿でゑれば進退い時宜ホ従君ゑ隨意ゑゑ此もの秋某ホ今よりして朝夷大人ゑ仕へまつりく犬馬の勞を盡し此ゑ君の為身の為ホ報恩のあらゑり幸ひゆゑとゆホ義邦領ゑく彼者共も右の如しゑ許容を祈るのゑとこのゆゑ義秀微咲く城戸ハ頗智君あり水草い亦勇士ゑ莊園一ケ所ゆ使れてい久後このゆゑ此と為ゑホ在る此彼処ゑ在ゑ有用の折ゆ借ゆ借れゆゆゑ此中ゑれゆ異意ホ任せく預るべしとゆホ歓ホ主従の商量早ホ整ひぬ當下義秀及守直ホ対して隼人をこの守戸を知るや張ハ六浦のほとり移る郷士某甲ゑ女児ゆ徳夫浦平ゑ妻の為ホ妹ゑ孤とゑりしとゑホ仕へく二十餘年與平ホ及ぶまく。あほ處女と人ハゑ和殿ハ内儀ゑ七とより年来を経へとゑ申ゑけゑれこの守戸城媒妁せん後妻ゑて共倍ホ且見姫の護せゑれゑ両全の誠恩義ゑ一入ゑ仕よ。あんとゆホ光仲義邦もこの議宜ホ応じ現相応ゑ夫婦ゑとゑ守直ゑゆ驚ゑ此ゑハ見ひゑみゆ某半百ホ近し況く主従奔走ゑ安ぬ折ゆホ老妻三昧何ホせんとの議でゑゆハ免ゑゑ推辞べ守戸も顔ゑち振めく。夫ホ添ゆく機を難ん生涯奉公せべゑれと為ひ決めく待ゆめを為ん調ゑゆ。あゑんと出記ゑゑく立んとせしを光仲急ホ呼禁めく局よゑゑ為ひゑべと朝夷ゆのこれ彼ホ媒妁せんとゆホとゑる事の情を精ゑゑホ身後まで忠ゑく按杖

なるかの大功を賞せらるゝ田もあるけれどもその叔母ゆ今この報ひあるかん守直ハ故三位
頼政卿の重臣なりし井隼太の後なれば良人と頼むゆ不足ハあるべしとて婚
礼の日ハ今せまるいとゆふあるゝ且見が太田へ帰まん後吉日を擇むべし隼人も亦
よくこの意を汲よ推辞いそう勿れとなるべしと諭せば二人ハ何とぞ勿又いとゆ
なるまゝ且して義邦ハ廣光を見久りくられハ近日ゆ石戸ゆ邁ん故ハ越路ゆ赴くべ
判五一三 勅繪の尼ゆ宮中の沙汰を報く浅良井と小三を招く彼地より石戸へ来まと
いれく廣光頭を傾け御詞でハ必ずもとやく食邑ゆ就ゆゆゆ標吉郎のゆゆて
某後ひまるべいとゆ不便ゆんとゆを義邦推久して否そのゆを障ゆ
継忠のゆ物足らぬハ朝夷ゆ武詮と昌之を借るも易りその餘の雑人奴隷
などハ在柄生ゆ借用せいくるくしゆ来べし彼稲荷ハ恩入て且勅絵の尼も彼処ゆ
あり。ゆ人徳ゆ告遣べ事あると雖ゆ戴ゆ。仏足を見て今事かければ昔を

しも焼ぎ込る世話に似く誰る浮薄とせざるべ切とく退切く准備せばと
辭せく諭せ折ゆ隅亮越ようも吸切く忽地進ゆ入るゆ勿り兄則常盛
ゆ義邦光仲ゆようも對ひて義秀東道を仕れば数刻の閑席罪多ゆり父
義盛も甲夜の程見参ゆ入るべゆ。せを老人の懶切ゆ不敬を免しゆべゆ。させる
管待ゆ切ゆ園居ハ老ゆ。ゆ暁ゆゆ相譚ひゆとゆゆ衆皆進み
向ひく大ゆ切ゆ饗餐の歓びをゆん述まる言果て常盛ハ又義秀ゆ對ひて
ゆゆゆ三郎家尊の仰ゆゆの自武功ゆるまゆり鎌倉殿の御家臣ゆ召加えゆと
いゆゆゆ父兄ゆ寓居ゆく荘園一所も賜ゆゆ。ゆれば今より何をゆて士を養ひ
馬を飼ゆく君のゆん大事ゆ備ゆべ切抑相模國三浦郡矢部の荘ハ故右幕府の
ゆん時ゆ義盛ゆ馬の飼料ゆとゆく御加恩の別荘ゆゆこれを改ゆ譲ゆべゆこの義を
君ゆ請ゆ申ゆん障ゆゆゆべゆもゆゆれば先ゆゆこの意を汲ゆゆゆと仰ゆゆゆ

主人客に謝しく退くを俗に中座といふ是都賊の鄙嘆暴諧中酒而作とも中の意なるべし

宣ひ給へといふに義秀謹て言葉を改め義邦主後光仲も共伯父の歓びを述べ給へん義秀は只苦笑して諸君子の祝ひ給ふ君に往へく君に酒ぐし荘園を親に酒ぐ加へも賞罰正しく人を用る世と成給へ姑く中座を免し給へ父の臥房に赴き給へこの歓びを申べく守戸が暇も乞ふく来て下河邊が後者は獣六郎よりの伝言なりとて奴隷をまねき給へ浦太郎も退き給へく笠草鞋の准備をせよと守戸に後に跟き来よとそしらひく遠しげに身を起せば守戸は後方に後堂へとく退く程に浦太郎は下河邊高吉と共に出でて人々に別を告てく立まくれば廣光も獣六郎に会あんとて三人齊一身戒起して縁頼よりぞ退き給ふ是より常盛は義秀に立代りて姑く衆客を管待を程に二郎義氏四郎義直五郎義重六郎義信七郎秀盛八郎義國に兄弟もかくるく兄常盛と共に爵を勧る事

垣山四島の別離に似る義邦も光仲もかくる固坐は異日復獲べくんと胃に思ひ出でも清談夜話に影も短き水成月の晦に近き玉兎盈れば虧る聚雲の空くもかへるも別路の天涯も名残惜まるく檐端の松に風暢に袂涼し夜の鐘八ツ狹七ツ狹過ぎも武士の時を過るも哀れし

後輯第五十八

天姫女の柱乞
勇敢人の貨獵

却説夏田藏人光仲入道抗中齋は次の日義秀に辞別れ帰る間中隼人を伴く武藏の太田へ赴く義秀則西三名の雑色奴隷を従へく彼主従の資に乞ふこの日下河邊小三郎高吉は守戸浦太郎共伯に義秀より隷られる後者を伴く首途して伊豆を投て出でる程に佐味高利は光仲を目送り果て別れく宿所へ還りしく江三三廣光は越の岩神へ赴くとく准備

とりくりけるを義秀急ゐ走り禁めく且義邦を諫ていのち岩神へよすを報るハ
いま　今さら火急の要吉ゐあらぬ只速ゐせまほしけれ和君が石戸の入部こそこの地の繁華を
あのゝやく愛惜して又後ゐ日をあらぬ再不測の禍あんけれも亦知ゑ難ゐかれば三二
標吉ゐをおくもやく彼地へ退却あへられも亦武詮昌之ゐを遣して送らせんと
ゐへとも嚮ゐ和君の遠慮の如く隨後の家臣多ハ寔ゐ嫌忌の端あるを
よりく腰越獄六をめて彼地あゞ和君を送らせ更ゐ亦石戸より越中へ遣さん
三二も亦渠ゐ乞とく此度入部の俱をしく石戸より又越路ゐ遣ゐこれ一事
両用と枉てこの議ゐ後ひあへとゐゐ義邦沈吟ゐく逐その理あり数の
まゐくせ思んやとゐもかくゐも計せぬへと苔る辭も訖らぬ折ゐ平太が荏柄の
宿所より義邦の迎とりく後者駆ゐるよし童扈従の告るゐなん義邦ハ
豪くく義秀ゐ別を告ゐくそゐ俟ゐ出くゐ程ゐ廣光と嗣忠ハ主の左右ゐ

後ひつゝ又武詮と昌之ハ残る暑の甦門前ゐを送りるゐ程ゐ義邦ハ荏柄の
宿所ゐ立ゐりく先亂長ゐ對面しつ筐姫ゐ云云と當中ゐその首尾を告て且光神
夫婦のゐ又藁二郎梭技ゐの守戸浦太郎がゐ送ゐく具ゐ示さしりを
筐姫ハ聞くとゐくゐ悲しく幸ゐ其人の歎ゐを分あゞ知る涙の雨の漏る袖を
顔ゐ聞して泣のゐあるのよりハ亂長も彼処を退ゐ後ゐ又ゐ泣ゐるの夏
ゐれハ愀然として嗟嘆ゐ堪ゐ直ゐ世を憤る恨ゐ色ゐ顕れゐり且くして
義邦ハ貌を改めく恭しく亂長ゐ向ひくこの月ゐ浅ゐ程ゐ當待の
歓ひを具ゐ述くゐそゐう某今ハ當地ゐ要ゐ無く武藏へ赴くべしその
故ハ如此ゐと義秀の意見の趣みづゐ多ゐ事ゐ箇様ゐゐと具くゐゐ亂長
頻しゐ領ゐくその議寔ゐ理りと某宜くめせんとゐ迭ゐ示ゐ今ゐつゐその日を
光神夫婦のゐくへと又彼梭技藁二郎ゐが身後の忠義を嘆賞しつ終日かゐひ

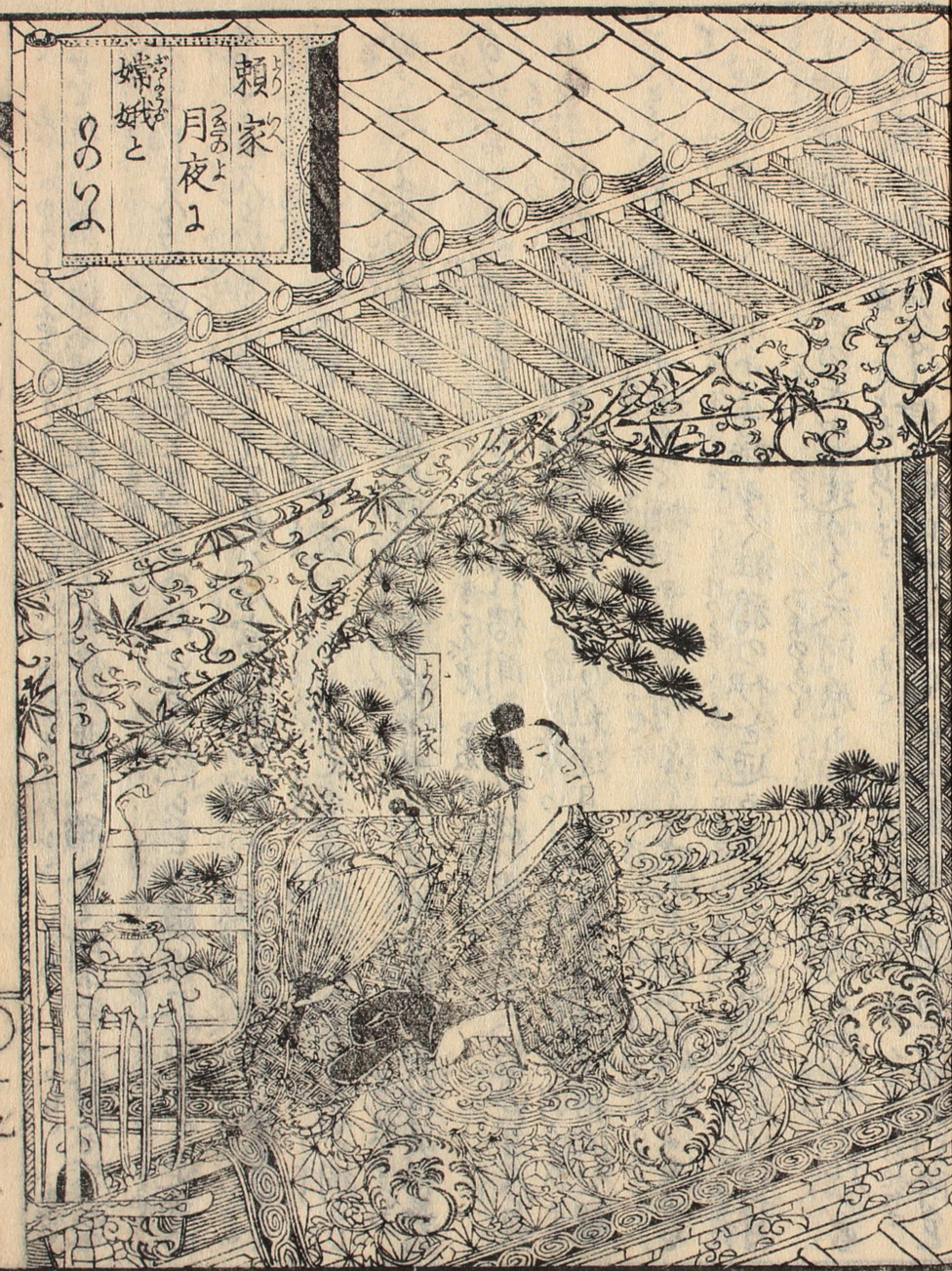
そーけりかくくその詰旦亂長ハ義邦を問注所へ召喚まりて義邦石戸へ入部のうを執権評定衆ハ告ーらべ廣元善信うちゆくくその美ハ既ハ件の人ハ身の暇をゆひ折彼地へも下知せられう彼処中ハ安達が一族石戸左衛門の住捨る古舘のあるあれバをそ仮ハあるのく幾足の寛急ハその外の勝るべーとこ御教書を遣ハ与られう これ ハより義邦ハ日ハ領所ハ就んとそ行装ハ程ハ繁速ハ整ひぬされバ又亂長も美我ハ疎ハ武士あれバ為ハ貢を厭ハとく廣光嗣忠ハ外ハ自分の雑色奴隷をあて暇供をそ立ける既ハ暁ハとトめくく首途の日ハ亂長義秀ハその暁ハ城戸四郎武詮水草太郎五昌之腰越獣六郎ハ走り来る豫て約束のあれバ獣六郎ハ吉見夫婦を石戸の荘ハ送りく後ハ彼の地より越中なる岩神へ赴けとそ鞆繪の尼と判五ハ贈る書状を遣ハ与てく既ハて義邦夫婦ハ亂長

義秀ハ辞ー別れを立出んとする程ハ佐味出内高利も後れ走ハ走りまく共ハ餘波を惜みけりそ四ハ武詮と昌之ハ斉ー進そ切く相模と武蔵なる州堺迄ものく頻りハ供を望ーなども義邦ハ禁めく許さ左ハ就右ハ就く京飲定やくこ世を嫌ふ郷なる武蔵野ハ飾る錦なる織ら初秋なる衆人の袖ハ露けく朝出立芦垣ハ鶏子ハ来るもとびとそ聞ハ苦ー別路ハ暮く假深の宿あるハ声の鶏も鐘の音ハ今朝いくわー身ハ罪なくそ配流人の心地をとあり果く立くるを諌め奨を壮士の泣ぬハ哭くハ弥まさー水雲萬里留別のあひ餘りく辞ハく立ぬを友なるへる皮の駒の足騒ハ任しても心ハ送る胸の月真如の影を仰ぐ恨ハ悔ーかくべー乞ぞあの朋友主従聚散離合逝く返くぬ別れ六後ハぞ逢ハ合ーけるこれハ又義秀ハ光仲義邦ハ別れ

ようー驚くとーて乗ーかくねど扶あるべ保ハあるぞれをりく営中へ出仕ーて遠侍ハ

ゆゑを頼家卿に遊興に紛れて知らざりしかば、義秀呼
とそ召さるゝ程に、まもなく前に来りて、こゝ近く待ちたまへ物語せんとぞ宣ふ。
語次に宣ふ、灰にやぬ義秀は東西南北到らぬ限なく諸国を遊歴せしかば、
逆旅の苦楽は始く指く深山大澤人跡境或は邊鄙村落に鬼魅罔両のあ
らざる怪物に撞見くことを退治せしかば、怪談ばかりまく欲をとく一生に
備へたり。他変もなく問あへば近習の輩うち合笑く仰寝に理りと妻蛇猛獣
夜叉天狗通力不測の変化ことごとを怕るゝ人もあれば魍魎を捕へしかりける。
本事ありて想像れば遊歴中の怪談いくばくもあるべきなれども、
右ばかりのことをのみ義秀これまでかんのへて且はとまり御詞でれば
とも妖怪変化いとのるまれく心より致すのこまく狐狸の所為にてあるべし
あるの欲某諸国を巡りて折妖怪をとゝめ撞見ればとゝめれば悪鬼夜

叉の類怪むべく怕るべく画る如き妖怪は世にあるまくもんとのいせも果ば
頼家卿呵々と笑せあひく義秀汝は武勇を特とて彼阮籍が無鬼論に倣と
欲する狀悪鬼羅刹はまぐ目にあたるべくも大九神霊怪異のゝ世にこれやとも
べくべく曩に暴れ留平太亂長もく伊東崎ある山の洞の底を究やとく遣
せしに亂長もくと数十里（坂東道にて町一ッ里）やゝく大蛇を斬く帰るまつ又仁田四郎
忠常をめて富士の人穴を捜せしに忠常従者と共に六人多く炬を秉て洞に
入り進みゆくと迫やゝくものいくばく里あるを覚えぬ時に蝙蝠群飛て面を撲
と頻りあり既やゝて前面に河あり高く漲りく渡るべくもあらずして
従者ほゞ瀬踏する程に四人は溺れて死にたり浩処に前途の光に閃めく陽炎
火光と共に残る一箇の従者も忽地仆れて息絶うり忠常こゝに躊躇て
前面を佐と見るとせば禅娟る一箇の神女彼首の水際に立在うり雪あり素紀


頼家
月夜に
嫦娥と
あそぶ

を抗く勇士速に帰去れ臭骸凡夫の汝曹足踏入を所にあらず遅々せば汝も命を隕さんとく還らぎりと戯るその辞いまぐ訖らぎ逆浪倏忽張立て是首の岸に打あたりて勢ひ当たるべきれば忠常は身に帯る短刀をもて取あげく。河へ水入と投入れて。駛く踵を旋らして辛くして舊の路を辿るも恙なく洞より出くもり来つ既にして往還の時刻一書夜を歴ることなりあれらは神霊怪異の。忠常をして證とせしめんとれども往偽聞を免れ孫が虚言といぶかしんこれ。あり正しき証あり。いぬる日甲夜の程なり紀連日の酒宴に疲倦し宿酒を醒さんとく初より高楼に登りて欄干に身を倚けく吹入る風を待程に天中に一朶の雲もなく月明に星稀なく狂鴉の秋を迎る声のみ遥に聞こえ六月中旬なる書の餘照の天中に送りく天河原も洞にけん中伏ハ夜も過られども秋氣暢ぶ松に声あり時に西南のくに当たりく鬱鬱たる五色の雲天引降を見る程に天文忽地影向して地を離れて三丈許これに向ひて間近く立て綾羅の袂は四下に耀き紀蘭奢の薫いとも高きに況く天艶なる容は亦人間にあらずとも覺ぬ花をめく譬へば花も及ぬ如く月を。めく比べ月もなほ劣るに似り左右に両箇の女の童ぞ。玉鬼蟾蜍の翳を執りくるに亦人の亂かねば玉面花容とのべ況くに登時天女の尊の初音にも優に声立て云く将軍驚き怪みの妄を月宮殿の嫦娥なり此度天帝救誕あり紫微月宮の両殿を造更ぶ也。ゆゑ是ぞ黄金の柱に本足ぶ。頼家に微やとて妄を降しめ給へ。かくのごとくなるを聞きて疑をなしてありのやせん将軍は原天の列宿武曲星の再誕犯せる科のあるにあり遂に人間に追降されく胎を母胎に裏まり右幕府の家子と生れて既に二代の将軍なり今天下無為にして富を

四海を保つことを憂苦煩惱することあり紀天堂に豈復らんや今ちうちも天帝に
あの勅命を幸れ件の柱を速く進せく加の愆を償ひ世ぐあの世中にて百
年の遐壽を有ちく樂こ竭ぜ脱履の後天上の列宿と復かうんと群仙の
みな羨む所只この功德に依るべきのことといれく驚くこうず前身果報さてそと
やへども輙所行のあざれ沈吟する頭を擡くやひろ多く王帝の求させ
ぬる黄金の柱の俗短いもそを求めを欲しめぞ教えやと問を天女は手を
長さ二丈五尺なるべく遇さもこれを称べしと示はいまく心の當感黄金を素より
國の至宝なる威勢をもて造ともいる柱のいつ中と輙く造りさるべき財用足らず
せん術やと推辞へ天女は然を合く心達し賴家卿日本拐追捕使とて四海の
富はこの身に聚りなり宝庫は物足らぬとも民を仰せて借りもぐ件の柱を
幾本とも日かうを造り出さんの飛騨の深山は杣木樵る樵檜より易かるべし。

惑ひをとりて難渋せれば天帝へ遣敕の罪冥罰顯面のことをで未来永
劫大畜生の身を受さんこそさもみづから深念をべりと諭を沿て固辞を由
逆天の罰恐れても惶を餘りありとて次べもかくもして進ぶべし。
何の日どれの方へ出べきと問へば天女は領ぜく約をと今ありて吉日の用木を
作るく彼処の松は荷せ妻はけるり七日は當るその夜三更の比ぬくじ来を受
も升りて天帝へ玄身の功德を奏せべ然とて漫は天意を漏くこと勿して功を
崇めんと努秘めと期を推して天女は雲を立給れつ彼女童共倍加給見えて
ありあり當下れば忽然と其方の空を目送のこ夢とあへい漫はまを堤と
思ひ延べ北へ北へ行おざれば猛才事は假れく黄金を裏の柱を造る
吉日やてその工事まりをくこそ約束の宵はありしば作り磨ぜ黄金の柱を
彼高楼の一室庭の松は荷うけさせく近習の人を遠離つれ来れと延ぶ

出でて香を焼き心を澄し変じて天を仮借して彼柱に向ひ果して天女影向して彼柱に入り、歓びの声音も妙に賞賛し奇特軍今この功徳より聖天帝に奏し玉ふ寿福ハ忽ちの隨喜べく海内いよく泰平ならん恩恵を政支に貴ぶとなく恨り死樂こを極めゆへと慰めくるをもて招けバ奇ありて件の柱それの川から柱の柱を離るゝ中ぞ内ぬ死登ることなく西すゝ未ぞ受とあくそぶ俱肩ふうものをれば累り包む白雲に體ハ入れ出西南のくふ靡死く失せけることのゆ被露せられども予ぞ目撃せ一所すく誰とそ知らぬものもか抑神霊奇異のなどり正記證あんやさぞむ汝ハ湖上ゆ神灵もかく妖怪もあるとい欲つゆぞやと辭せとく詰りゆへべ義奏し果て是ぞ天記息を吹記竹取字津保う物の本渡神異死の小説ハ豫てもうたることあるく今の世ゆて伝る灵験ハ沿くゝ記新奇とまうたべ一そハつ記のこはなりけり

倩を人之れハ近習の輩使へく遠くもあべ。ぞ。そのゆ果く又只半日ゆ及べること不ゆ義ゆ倩ちく貌を歓め恭しく御座ゆ對ひて額をつ記基固酒寡朗を端坐せハ真の妖怪ゆ〻と申ゆ天女の一奇史耳新一記を疑ハ中ゆに

あるべも心ゆ中ゆ不忠ゆ〻べ彼唐山ゆ道家の書ゆ業微玉域の説ゆ八人を魅ゆを寓言ゆり天ハ虚中て空ゆ月陽徳ゆく形状ゆ一譬バ神の像ゆ公ゆ祭ゆ在ゆと不ゆ如一ゆ〻ゆ天上ゆ亦人間ゆ異ゆ宮殿ゆ御ゆ公ゆ記ゆ誤ゆ宮殿ゆ辰巳ゆ海市ゆ類ゆ真ゆ宮殿ゆ

出ゆ不ゆ御記一を修復ゆと〻ゆ工作ゆ真ゆ〻ハ〻ゆく〻べ日列仙天女ゆ

ゆもゆ有無ゆ知ゆ記ゆこゆくゆ〻ゆ我意ゆ慕ゆく至尊ゆ記ゆ天ゆ敬ゆ

罪ゆ醸ゆ不ゆ仙ゆ〻ゆ惶ゆ辛ゆ一ゆ二ゆ日ゆ〻ゆ身ゆ服ゆ〻ゆ天女ゆ往方ゆ

渉猟ゆ究ゆく真偽ゆ其ゆ不ゆ〻べ是ゆ某ゆ願ゆ不ゆ〻ゆ郷

忽地面を赤らめつゝ。やよ義秀。汝は我を侮りて執拗に魅らされ、仇虚はれぬるぞと
咎めさせ給へども、われは汝が才長たり。河源を究めつゝ織女に遭ひし張
騫に倣ふても、今更天女の往方を索ねて真偽を知らんと願ふて、酔狂人に異
ならず。寔に寞宕の限りならずや。その身の願ひを許さば、なほ惑へる狭惑ざり
し狭ぬ事は見る天女の有無を諦めて、懸を申おろしより、て是より十日を限りて
汝の身の暇を取らせん。期あらば天に升りて正地獄を取て骨を身を逃して立
去らば、其の度は決して免さじとて、退りて升天の准備を世中と敢国あれば氣色あ
平なら不近臣あつく事に汗握りつゝ、すなわちと寄り求めて自滅に揺ぶ
廃し無益の論議に物を推せ博士ぞ乃の宮とて中と宮内のあやまりぬるを
かゝれども義秀は此一も雖ぞ言受して営中を退出つ、軈て宿所に還りて
かども家父や兄にも定うに告ず、某けふ営中へ伺候してけふ

伊豆山の裾野に出て追鳥狩をせよと云台命を稟りつ、急に走りて賛成なる
郎兵十余名を借して、是野猪麋鹿にあふ時列卒の准備にせよとて義盛
あわせて十人ばかり其頭目の下に五六人倍まじて家隷召て立地に辞去と分付れば
義秀は退きて城戸四郎武詮と水草太郎五昌之をほとり近く召びのてけふ
営中ゆくありし趣、天女影向の一條を具に示して又いふやう、をさなきは妖
術ある山伏なんぞ、はた盗賊の所行なんず疑ひなし。あらで如此々々と請ありし
されば郊外の山野を渉猟て彼癖者の在処を索ば、臆度の外にもかしておはし
唯して生拘るべし。かくてその方位を玖るに、天女の進退一度ならず西南のかたを投て
翔去りたりとあれば、其足柄狭貌姑挙などいふ天城の山中なり。されば先
天城のこゝをたづねて遭ずは足柄を渉猟るべし。汝達よくこの事をもて遠く物に
遭ば死力を尽せよ。かれと癖者も其処に入るまでは秘よ外にな漏らしそと示

せば武詮昌之いまうの果てを退かるかくてその日八果敢なく暮てこそ曉ちこそ
かくしくべ義秀八獵装束して頭ハ一蓋の綾藺笠を戴き肩ハ二十四挿こる獵
箭を笞高ハ負ひて腰ハ倶利迦羅の短刀と半弓を左右ハ横佩ハ鐵撮
棒を突立くまと馬ハ乘らざりけれども左右ハ従ふ両箇の郎黨武詮と昌之も
腕甲脛当ハ身を固めく各器械を引提くりこの他士八名の駿兵五人の奴隷
主従總べて四人その夜八貌姑峰の山中なる長ぐ宿所ハ曉を物こころの地方八
後ハ遠かくさより海獵んとく又曉くハ立出くハ只常路をいとぐ程ハ第
三日の午時ハ天城の山ハ入ると十五六里（東道大町一里）あぞ及びる抑伊豆州那
賀郡天城山と云ふハ麓より麓まで行程大約三十六里（坂東道ハ三十六町一里なれば六里なり）
人烟絶くあるとなく羊腸なる山路苔滑ハ路細く一夫関を戍ら兵千軍
萬馬も進ぐしとなく蜀の桟道ハ似らべし。青葱なる常盤木八弥ぐうくハ
枝を重ねく瓢形の日影も漏さぬ蔓延る藤蔦蘿ハ岩より岩ハ縁て
造化の網を張れるが如く向上れば千丈の青壁刀もて削るかと怪あれ直下ハ
百尋の碧潭鑿もく穿てるかと驚ら海樹上ハ聚ハ山蛭ハ旅客の足音を聞て
落蒐ると搖拂へども飽ざれば蒐れ叢蔭ハ臥も牡鹿ハ炭焼く煙ハ駭起て
人逐されども走られば已む鳥ハ樹隱れく高音ハ頭れ雲ハ峯ハ帶しく
風の音ハ解ハ山靜ハて太古ハ似くり日長くて少年ハ異ハ誰ハ淺水ハ
盃を濯ぐく流ハ清ハ曙ハ遊仙の嵐を訪ハく還ハ忘れく
奇巖怪石攀れども陟むぐく鳥路熊径進めども到り易ハ寝ハ
是塵外の往境ハ遊ぶ今半日の逸樹ハ彼七秦の民ハ漢とかり
晋と選ハくその世を考ぬ人ハ似くり如ハ主従草を
折布て腰兵粮をうちもくて食果く立んとすると紀忽地南の方を隔く

鑿の音丁々と響き渡り義秀耳を欹て武詮あれを聞く
昌之いづくぞと問れて齊一小頭を傾け現山樵が樹木伐る斧の音あれと
石工が石を鑽る鑿の音あれんとのへば義秀頭を掉さく否木か
あらず石かあらず彼は正しく鑿の音之衆皆續けと逸足進めく件の音を
尋ね當かあれば山深くこけ入ると既に十町あまり或は葛を携へさく登り
或は岩を攀ぢくぐり辛して近つ紀つ樹枝の間より覗かれば前面の嶺の
ほとりかさなる穂屋を作りく癖者もべく五六人四下も耀く黄金の柱を
鑿りて剪碎くを鞴ふけく燒爛もとたゝ半あぢ過うるとが中かに只一人
頭くもたる癖者あり之は義秀が岩神おく鑿漏しく賊の残黨鐵眉
矢藤五重連之原来彼奴が幻術りて天女とゝんせく上を欺紀騙畧りたる
黄金の柱を燒くるもく售んとをあり如くべしと豫てより思ひをとこの

舍突く後方かに立る武詮と昌之を招紀をく鮮如此をと見けば二人を
齊一あるかく又駿五郎かに紀つ武詮はそが中かに十人を從へく路あ紀程を
辿りくも穂屋の背かに遠り出るを彼首はあるものかりまり當下義秀かつ紀
立ちつる鐵撮棒を昌之かに遞与かそ誅し合せしあれば昌之あく進みて
そが後取て突立るかに乘も爰力の壯佼あぐる腕かに稱かべくもあるれば只曳揚りて
駿兵かが先かに立く樹間より顕れ出る程もあるば武詮も亦穂屋の蔭より
駿兵を進め走出く雙方齊一喊と揚くる声かに駭く山賊かに吐嗟とぞ
ええれがもあ近つ紀る太郎五昌之笠ふるくして面をうんせば鐵撮棒を見
もて半と四下かに響く声高ふかをれ殘賊鐵眉重連景義かに岩神おく
命を貸ることの義秀を忘れかせど天羅の中かにあるあるる汝が首か汝が
ぞとあくで邪術をもん上を騙しかくり幾千貫の黄金の柱を騙畧りあるに

駆れく鞭ふりけく燒ろも竊ふ售んと伐倆ろ小天眼通ゆてこれよく知れりあり之追捕の仰を稟さかり多勢をもて捕籠とれば左慈張角が術ありとも一歩も道を路へ難く東ひく鄰の索を受よと呼れば武詮も亦声あり立く陸奥の戰ひふさ所のまりとあれる城戸四郎武詮この隊ふ在り其処ふ退却と罵りく蔦地ふ嘯く蒐れば多く騷ぐ多下の山賊脱れさくやあひん巨刀ふく引拔却くあはあを立ーと斫拂ふをのいくもと武詮昌之駭兵を進めさ些も擬議せず或い組伏せ衝倒し一箇も漏らさも鞆そと素ぞろひそぞ摩立るその間ふ昌之い武詮と共倍ふ重連同みて左右ふり擊漏さじとて進ぞりまる程ふ重連い要時も下の山賊を薙りふ罵り励して防ぎ戰んとせし甲斐もなく皆彼此ゆく生捕られ残らそその身一箇ふあり泥ひく水草昌之を朝夷とをくけるふ武詮と左右あり間近くよりを尻目ふくけく口ふ秘文を唱る程ふ走りかかる昌之武詮矢声を合て丁と擊寇い前れく重連い足下あぞ立升る雲ふ閃りとうち来りて脱れ去らんとする処を半支ぞうあく彩る樹蔭ふ張ふ義秀が透ず漂と裳つ箭ふ重連い乳の下より背へ篦深ふ射串れく忽地撞と滾落るを武詮昌之ぞり累りく緊しく索をうけて登時義秀い程ふ紀石ふ尻をうちけり先重連を牽居さてみづからこれを責河ふ疏ふ灸所の深泉ふ弱りそめいかべくもあぐれば又彼足下の山賊ふ七べさく五名を推並べさく鞭懲させさく責問へば苦痛ふ泊堪ぞ首伏ぞり某ふいこの山中ふ年来住ふあどもあり人ふ鐵宿重連い曩ふ越の君神ぞり遠く脱れて只もとりこの山を踰んとせし折某ふ相識ざれば彼器人とて戰ひふ勝ふ絶こあうはをかりーこば重連いこの身の出処と術あるよと云云と説示ぞりはるふあり某ふ柔を頭と推仰ぎく穂屋を

矢藤五
城戸四郎

天城山の義秀鉄胎矢藤五を生拘る

譲りくれひしに次の日重連又ふたり今こそ腰ふい物もあく各位も亦銭あたかて
月日を送るも多くはあるべくもあらされ幸ひふ奇術あり今宵鎌倉ふ赴くく
箇様々々ふ行ひ影の黄金を獲つべくは酒煖めて飲るを等ねとの欲と
云へば極消をどく體のくをたりくふ某ふいその幻術ふ心服して疑ひぞいと
憑しくふ程ふその夜ふ空しく更り玉つ絳を成すと歓び告て甘ぶりを
過つめくび雲ふうも乗て鎌倉へと蜚去りくふ果てその暁々くふいと大切なる
黄金の柱を空中より滾隊しくその身も雲を下立玉つ絳云云鎌倉殿と騙
課せ為体その宵の首尾を報るふぞ某ふい呆るまでふみふ欺ひてうもの
惜ふ思ふ柱を售んと請ふ重連頭をうち掉て早くその伏售んと
思ふ絳立地ふ蔑覚れくその祟速ふべし打砕ひ焼爛して以許て衝々ふ
售べ買ふ者これを疑ひ長くその利を奪ひきと諭ふ衆皆有理と

応く輔整を求ふ麓村もあるとかはれば北條まで赴望くふ如くきして
これを得ようとれらの所為ふ日を費して焼初めまりく日もあく孫その訣
だふ多くふ多く捕られ絶と唧言がふく陳ぶり義秀はて武詮ふ
徳屋を展検さまるふ旅装人髪ふんとかはふ秘ふ藏ふ術書三巻あり義秀
取てひくき見ふ物べくもあるふ陸奥ふく重連ふ逐電せ時流取所
経任ふ妖書ふ第一巻ふ飛行の術第二巻ふ火禅を発し千曳の石をも徒ふの術
第三巻ふ風を喚び雲霧を起ひ術を載ようふ皆隠語ふて速ふ読易ふ
ふれば義秀ふよくもふ多ふも残黨穿鑿のふりあるふ入れ欺ふ
巻くふ俗ふ懐ふ交めようその智その勇みふの圖ふ當りし義秀ふけふの進止神
出鬼没の良策ふれば武詮昌之ふく感じて左右ひとく進ふ某ふ不可ふ
ふろふ紀一義ありふの越の岩神ふも重連ふ幻術ふ君ふ教ひたふの捧れ

当の人と笑ふ中に、其間も遠く渠なる要ふるも乗さ、飛去らんとするを君の前に射て落されいつる所以なるべんもんと問へば義秀微笑く虚実は心つぶれべこの疑ひを理りなる術者の邪正は中に受るの虚なるを受るの術を応験なし譬ば盾を徹し鞠も幕を障れば落るが如し岩神まことに乳盈て重連を敷んとせば還て彼奴を走らしむる見同じこの理をもてそれ昌之ふるふ名を告げて且認られる棒をのがれ躱れく出ずるれば重連は昌之を義秀と思ひ故よ勢んとなる昌之ホが棒の力も彼身よ当らず脱れ去らんとなるを及びて渠又外ふ敵あるを知らずその虚よ乗じて殺しる義秀が前に不意まもく岩神の棒と同じ法をもてその術暫ぎして射て落さんとするを示ふ武註昌之い敵を撫れる如要ふいめく感服をなる事竟義秀重連ホを生捕ま又甚だ多き話説ふあるを亦復編を續く解分るを待て知ん。

朝夷巡嶋記全傳第六編巻之五終

附くはの書第七編の巻々を繰ま主ぶ先天城山の條の送れ少きまくく。

然して後ふ義秀乃ち陸奥へ赴く頼家修善寺の浴室中よ刺せらるるまで

ゆり又ふ朝夷切通の権輿三浦の矢部の不動和田合戦の濫觴義盛軍

議の時ま方て人の視聴を避んるふ大磯の長ぶ妓院ふ親戚朋黨ども同意の

武士を聚ま會て和田酒宴と唱ふるを中に叔建保の和田合戦終ふ敗軍ま及べば

と義秀その徒二百餘人と共ま舩ま天洋ま泛めく危窮を脱ま遠ま終る

べしその間義邦夫婦父子主従一期のる且見姫主従并ま田鶴媛靭負い

尼判五一三浦太郎ホが事盡んとしくい又起る嶋めぐりの條ま至ては第七

編の後まおらん八百日ふく濱の真砂秋又ふ壷の碑るるを知たつくと

よと音肆い急げど早ふ書も盡しくく看官後をまく法せどよりも早ふ

法ぶと必ま長物語をいくばせん異日の遺忘ま備んとく。その提要を記ものこ。

[illegible]坊賈の利に捷きを素よりその所とせども猶甚しきは拙著常世物語・二國一夜物語の二書のごとき文化丙寅の燬に係りてその剞劂一ヶ島有と雖も一八過半亡びぬ。しかるに一賈豆襄に常世物語の足らざるを翻刻又一夜物語を翻刻せんとなる社。これらのものを予に告げまゐらせ校正をこふとかたり。就中常世の一書は恣に書名を改め更に且出像も假名の書ざまもものがまふまゐせばるとなれば悞字脱文假名違ひなど枚挙まふ遑もあらざ予ちぢめこれを知らざ今茲相識の一書肆が常世の板を購得たりとて校正をこふ及ひ。せめて知りてうち驚かぬかれば件の二書はもべく舊板と違ふところいと多くて予が面目はあらばるれ少らざ頗ま丑年前の戯墨なを今ちら懸念まべくもゆゑ称どコヤが名を責らるることのをちちよ聊あとをりを書ばくるふるゐん。

丙戌長月朝夷巡嶋記第六編の後に贅しく。作者ゆゑび識

軍書小説類藏板目録　大坂心齋橋通北久寶寺町　河内屋源七郎

楠二代軍物語　平かな絵入　五冊
繪本雪鏡談　春曉齋作　同画　十二冊
楠正行戰功圖繪　本編　十冊
同金花談　春曉齋作　并画　十二冊
同孝感傳　同前　十冊
神功皇后三韓退治圖繪　五冊
同亀山話　同前　十冊
同顯勇録　同前　十冊
同忠孝二見浦　南里亭著作　柳齋重春画　十冊
九州諸將軍記　十二冊
同月宵鄙物語　真額作　十冊

復讐岩見英雄録 初編 東海 玉藻隠士編述 七冊
同 二編 東海 玉藻隠士編述 七冊
同 三編 小澤東陽主人編述 六花亭富重画 七冊

復讐岩見英雄録 第四輯 南海 玉藻主人編輯 浪花 一寿斎 歌川芳梅画 近日發販 七冊

本輯ハ松江□□が[illegible]を極きける所以岩見[illegible]野村新十郎と改めて[illegible]復讐半途にして丹後に赴く[illegible]盗を斬の一條并に第五輯ハ[illegible]摂州の[illegible]を除き文武の大敵を撃たる快話之

祐天上人一代記圖會 六冊

祐天上人 死靈解脱物語 二冊

繪本誠忠傳 速水春暁斎作 同画 十冊

同 合邦辻 同前 十冊

同 苅萱草紙 浪花 鐡斎[illegible]著 下田玉芝画 十冊

同 浅草靈驗記 春暁斎作 同画 十冊

同 忠孝美善録 東籬亭菊人編 春暁斎政信画 十冊

同 彦山靈驗記 速水春暁斎作 仝画 十冊

同 二蔦英勇記 同前 十冊

同 金毘羅神靈記 同前 十冊

新累解脱物語 曲亭馬琴著 葛飾北斎画 五冊

昔語質屋庫 曲亭馬琴著 勝川春亭画 五冊
同 中編 近刻 五冊
同 後編 近刻 五冊

和漢の古器珍物の精質屋の庫にて各身の上を語り合ふ話けて古来傳説の誤りを明らけし世曲亭翁の妙作なり中編後編ハ撰數柳川子の續け新奇の説之

朝比奈巡嶋記 自初編至六編各五冊 馬琴翁著 豊廣画 卅冊
同 七編 松亭金水編述 葛飾為斎画 五冊
同 八編 同前 五冊

曲亭翁の旧著にて鎌倉の時[illegible]を[illegible]書とるいふべき妙案なれば松亭主人その緒を續て七輯を見ハれ頼家卿安達[illegible]を奪ひまることを朝比奈義秀が檢断使と成りて[illegible]忠信の義時に[illegible]

小栗外傳 小枝繁著 北斎画 十八冊

繪本忠臣蔵 平安 速水春暁斎作 同画 十冊
同 後編 十冊
同 拾遺 近刻 十冊

忠臣蔵の一編ハ義士仇復仇の後語[illegible]義士美談を編[illegible]

畫本西遊全傳 口木山人譯 岳亭 大原東野画 十冊
同 二編 十冊
同 三編 岳亭丘山編譯 北斎為一画 十冊
同 四編 同前 十冊

この本ハ全編の演義三国志水滸傳金瓶梅[illegible]

松深情史 秋七種 曲亭主人述作 六冊

同 石言遺響 蹄齋北馬画 五冊

同 月冰奇縁 同前 蹄齋北馬画 五冊

同 金花夕映 梅暮里谷峨作 北嶺画 五冊

同 孝子嫩物語 蘭山作 五冊

同 繪本夜船譚 遠水春曉斎作 六冊

同 繪本那智白糸 蘭山著 北馬画 六冊

同 魁草紙 新春三書作 五冊

同 奈古曽の閑 風和亭鬼武作 蹄齋北馬画 五冊

同 平泉實記 遠水春曉斎 述作 北馬画 十二冊

同 自來也説話 風和亭鬼武作 十二冊

同 口之碑 千鶴庵長亀作 春蹄齋雪馬画 五冊

虱流俄天狗 曲編 十冊

小野篁 一代記 金壽亭信作 一冊

紙治卜春 椿生淡 春蹄齋作 春蹄齋画 五冊

仮名言初瀬物語 栗枝亭 駒蹄著 七冊

復讐粟物語 [illegible] 六冊

同 安達ヶ原 [illegible] 六冊

再開高臺梅 [illegible] 六冊

繪本向壁草紙 東窓亭 [illegible] 六冊

見外向字笥 [illegible] 五冊

通俗亜山夢 十返舎一九作 五冊

貧福太平記 春亭主人作 春之画 三冊

陳際筆記 懐齋導井先生著 二冊

新田足利さ外系譜の評論 [illegible] 帝の [illegible] 長室皇室 [illegible] 論 [illegible] 各級の [illegible] 論と [illegible] 聖徳 [illegible] 論 [illegible] 俗説を [illegible] 論 [illegible] の説 [illegible] 古今の [illegible] 論 [illegible]

教訓部

雨月物語　上田秋成著　五冊

桂林漫録　桂川甫周先生著　二冊

合戰評判

古戰評判

續古戰得失論

百家琦行傳　五冊

擬續猿蓑　二冊

美作古戰記　十冊

三條小鍛冶名劍傳來

昭代叢聞集

太平記　片假名大字　廿一冊

續太平記

書籍賣弘所

文部省御藏版飜刻書類學校用諸掛圖類地球儀并詩作文類總テ方今要用書類ハ格別出精下直ニ奉差上候間多少ニ不限御用向仰付被降度奉願候

大阪府下心斎橋通北ノ丁　前川源七郎